

2012年12月31日・河北新報では

詩集『広野原まで——もう止まらなくなった原発——』

芳賀稔幸 著

著者は1954年いわき市生まれで、同市在住の日本詩人クラブ会員。東日本大震災による福島第一原発事故など、震災後の社会状況と向き合い、怒りややりきれない思い、悲しみなどを詩に託した。切実な生活実感に基づいた反原発の詩群だ。

第4詩集となる本書には4章に分けて26編を収録。1章の「だれもいないけど?」は、「死ぬかもしれない」という衝撃的な言葉で始まり、震災後の孤独感をつづった。

「もう止まらなくなった原発」では、「戦争責任を有耶無耶(うやむや)にして来たのと同じだ」と訴え、原発事故の責任の所在が不明確なことに対し、憤りをぶつける。

4章の「自責の行方」では「一体核爆弾と核燃料にどれだけの違いがあると言うのだ」とメッセージ性を強く打ち出し、核に依存した生活に警鐘を鳴らしている。

タイトルはJR常磐線広野駅構内に設置されている童謡「汽車」の歌碑の「ひろのはら」から取った。

と紹介されています。